

『台湾日日新報』に見るソプラノ歌手
永井郁子（1893～1983）の台湾楽旅

津 上 智 実

The Taiwan Tours of the Soprano Singer NAGAI Ikuko (1893-1983) Attested
in *Taiwan Nichinichi Sinpou* (*Taiwan Daily Newspaper*)

TSUGAMI Motomi

要 旨

本論は、『漢珍日日新報データベース』によって『台湾日日新報』を調査し、永井郁子（1893～1983）の台湾楽旅の実態を解明することを目的とする。調査の結果、記事81点が見出されること、そこから永井の台湾楽旅は第一回（1928）、第二回（1930）、第三回（1933）、第四回（1936）および第五回（1937）の5度に及ぶこと、永井の台湾行きは詐欺事件に端を発していること、これらの記事から第一回6件、第二回4件、第三回22件、第四回1件、第五回2件、合計35件の独唱会の存在が知られること、とはいえ、それらは実際に永井が行なった演奏会のせいぜい半数程度しか報道していないこと、内6つの演奏会については演奏曲目の詳細が明らかになり、他の3つについてはプログラム構成の大枠が知られること、第三回については当時の拓務相永井柳太郎の勧めで渡台し、多数の小学校・公学校・高等女学校・師範学校で独唱会を行なって、永井柳太郎作詞、宮良長包作曲の〈新日本建設の歌〉を歌い、かつ児童生徒に歌わせたこと、永井の渡台を組織したのは台湾総督府の官僚を中心とする永井郁子女史後援会であったことが明らかになった。

キーワード：永井郁子、邦語歌唱運動、台湾日日新報、永井柳太郎、宮良長包

Abstract

This paper aims to clarify the performing tours to Taiwan by the Soprano singer NAGAI Ikuko (1893-1983) as reported by the *Taiwan Nichinichi Sinpou* (*Taiwan Daily Newspaper*) using the database prepared by the Transmission Books & Microinfo. The results of this research are as follows: 1) There are eighty one articles in *Taiwan Nichinichi Sinpou* related to her. 2) Nagai made Taiwan tours five times in 1928, 1930, 1933, 1936 and 1937. 3) Her tours resulted from a fraud case. 4) Thirty five recitals are reported in these articles (six for the first tour, four for the second, twenty-two for the third, one for the fourth and two for the fifth). 5) These numbers represent no more than half of the actual recitals given by Nagai in Taiwan. 6) The details of the program are reported for six concerts and the structure design is reported for three. 7) She made her third Taiwan tour on the advise of the Minister of Colonial Affairs, NAGAI Ryutarō, giving recitals in many schools (elementary, girls', and normal schools), singing the 'Song of the Construction of New Japan' with the lyrics by NAGAI Ryutarō, the music by MIYARA Chohō. 8) NAGAI Ikuko's Supporters' Association was established for her second Taiwan tour in 1930 and its main members were officers of the Taiwan Governor's Office. It is also to be mentioned that in February 1932 NAGAI Ikuko made the school boys and girls not only listen to but also sing together the 'Song of the Construction of New Japan', whose text is nationalistic and aggressive. From today's point of view, this appears to be an anticipation of the Japanization education to come in Taiwan in September 1932.

Keywords: NAGAI Ikuko, Taiwan, NAGAI Ryutarō, MIYARA Chohō

0. はじめに

戦前に活躍したソプラノ歌手の永井郁子（1893～1983）は、戦後の音楽界からはほとんど忘れ去られている。戦後の音楽事典においても、近年の研究においても、立項もされず、取り上げられもせず¹⁾、忘却の淵に沈んでいる。唯一の先行研究（後藤、2000）も音楽批評に力点があり、永井の活動そのものは論じていない。だが、日本声楽界の生き字引であった畑中良輔（1922～2012）は、その著『日本歌曲をめぐる人々』（音楽之友社、2013）の第1章（5-9）を永井郁子に割り、「美しい容姿、清楚な趣のある」リリック・ソプラノで「日本歌曲を愛する人々にとって忘れてはならぬ名前である」と位置づけている。

筆者は近代日本における芸術歌曲の成立を歴史的な史料に即して再構成しようとする中で²⁾、日本語で歌うことに関して大きな働きをした歌い手がいたことに気がついた。それが永井郁子である。永井郁子が1926年に邦語歌唱運動を提唱して、千回演奏を発願し、それを完遂したことは、朝日新聞と読売新聞の調査によって明らかにした通りである（津上、2018、2019b）。永井の演奏旅行は全国各地に及び、そこには当時、日本の植民地であった樺太や朝鮮、台湾も含まれていた。朝鮮への演奏旅行については1928年から1932年までの6度に及ぶことが、『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』の調査から判明した（津上、2019a）。

では、台湾ではどうだったのだろうか？幸い、戦前台湾の主要紙『台湾日日新報』が有料データベース『漢珍日日新報データベース』として公開されている³⁾。これを活用して、永井郁子の「台湾楽旅⁴⁾」の実態を明らかにするのが、本論の目的である。

1. 『台湾日日新報』に見る報道

『台湾日日新報』は、1896年創刊の『台湾新報』と1897年創刊の『台湾日報』とを統合して、1898年に創刊された戦前の台湾最大の日本語新聞で、1944年の終刊までに15,836号を発行した⁵⁾。『漢珍日日新報データベース』には、これらがすべて収められている。

このデータベースで検索したところ⁶⁾、『台湾日日新報』には永井郁子に関する記事が81点

- 1) 永井郁子は、岸辺成雄編『音楽大事典』（平凡社、1983）全6巻でも立項されておらず、藤井浩基『日韓音楽教育関係史研究』（勉誠出版、2017）でも、高木東六が伴奏した歌手の名を列挙する中で一度言及されるのみで（206頁）、朝鮮における永井自身の活動は見落とされている。なお、後者はピアニスト小倉末子の京城における演奏を論じる際、筆者の先行研究に依拠していると思われるが、注でも参考文献でも言及が見られない。
- 2) 「植民地における近代音楽の帰属意識：東アジアとオーストラリアの芸術歌曲の場合」（科学研究費補助金基盤研究C、平成27-30年度、研究代表：時田アリソン）の共同研究の一環として取り組んだ。
- 3) このデータベースの購入と記事検索、中国語記事の翻訳および許諾確認については、台湾出身の李恵平氏（現在、東京芸術大学大学院音楽研究科在学）にお世話になったことを記して感謝する。
- 4) 永井自身の用語。
- 5) CiNii (<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AN10541707>) および丸善雄松堂のサイト (<http://myrp.maruzen.co.jp/ypc/taiwan3/>) による（2019-9-10閲覧）。
- 6) 2019年1～2月に複数回アクセス。

表1) 『台湾日日新報』の記事数(年月別)

年/月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
1924										1			1
1927												2	2
1928	1	18							1	1			21
1930										1	12	10	23
1933	1	15	6			1							23
1936												5	5
1937		6											6
小計	2	39	6	0	0	1	0	0	1	3	12	17	81

見出された。これらを本論末に「『台湾日日新報』永井郁子関連記事一覧」(以後、「記事一覧」と略記)として掲げる⁷⁾。

まずは、これらの記事の時間的な付置を「表1)『台湾日日新報』の記事数(年月別)」として示す。

表1を見ると、これらの記事は(1)1928年2月、(2)1930年11月から12月、(3)1933年2月から3月、(4)1936年12月、および(5)1937年2月の5箇所に集中しており、ここからすでに台湾楽旅は5度であったことが推測される。

2. 台湾楽旅の実態

次に、これらの記事から永井の台湾楽旅の実態をどこまで再構成することができるのだろうか。それを試みたのが、「表2)永井郁子の台湾楽旅日程」である。ここでは、独唱会の日時、会場、主催者、後援と出典を示すが、演奏会以外の動向についても丸括弧付きで記載している。

「出典」は「記事一覧」の記事番号である。新聞記事は予告記事と報告記事に大別できるが、予告記事の中には、演奏会の日時や場所が変更になる例も散見されるので、主に報告記事を掲げる。ただし、報告記事がなく、予告記事のみの事柄については、記事番号の横にアスタリスクをつけて掲げている。なお、第一回台湾楽旅については、「永井郁子邦語独唱会年表」(永井、1929:137-151)にカウントがあるので、それを【 】付きの番号として付記する。表中、ゴシック体で記した演奏会は、新聞には記載がないが、この「永井郁子邦語独唱会年表」から実施したことが確かな演奏会である。

7) 本来、出典としてこれらの記事の翻刻を「記事一覧」中に掲載すべきであるが、記事翻刻のみで論集の字数制限を超えてしまうため、ここでは割愛せざるを得ない。

表2) 永井郁子の台湾楽旅日程

日時	会場	主催	後援	出典
【第一回】⁸⁾				
1928-2-6	(神戸発因幡丸)			6
1928-2-10	(來台、鉄道ホテル泊)			11
1928-2-10	(新聞社 ⁹⁾ 訪問)			13
1928-2-10、17時	(鉄道ホテルで歓迎茶話会)	(安田氏挨拶)		10
1928-2-11、19時	台北、医専講堂			[53] 15、17
1928-2-12、19時	同上			[54] 16
1928-2-13、夜	台中、台中座			[55]
1928-2-14、昼	彰化、彰化高女講堂			[56]
1928-2-14、19時	高雄、第一小学校講堂	高雄真宗仏教青年会 (櫛田氏挨拶)		[57] 19
1928-2-15、夜	台南、戎座			[58]
1928-2-16、夜	嘉義、嘉義公会堂			[59]
1928-2-18、昼	新竹、新竹小学校講堂			[60]
1928-2-20、午前	台北、第三高女講堂			[61]
1928-2-20、午前	台北、第一高女講堂			[62]
1928-2-20、14時	樺山小学校講堂			[63] 21
1928-2-21、11時	樺山小学校講堂			[64] 21*、22
同、午前	蓬萊公学校			[65] 22
1928-2-21、14:20	列車で台北発 便船で離台			20* 21*
【第二回】	(再び台湾楽旅ニツク)			
1930-11-27	(基隆着、吾妻泊)			32
1930-11-27、20時	(鉄道ホテルで歓迎茶話会)	永井郁子女史後援会		33
1930-11-28、13時	(京町越智氏方奥座敷)	(三絃と試演)		35
1930-11-29、19時	台北、医専講堂			37
1930-11-30、19時 →12-3、19時	同上 →樺山小学校	(焼失で延期)		38 43*
1930-12-2	新竹、小学校講堂	新竹高等女学校 同窓会	新竹州教育会	42*
1930-12-6、夜	高雄、高雄劇場			44
1930-12-8、夜	(鉄道ホテルで歓迎茶話会)			45

8) 第一回から第三回については、関連記事中にその旨の記載があるが、第四回、第五回については筆者のカウントによる。

9) 台湾日日新報社の意。

日時	会場	主催	後援	出典
1930-12-10	(新聞社訪問、寄付)			46
1930-12-19	(朝日丸で離台)			47*
【第三回】	(三度目の来台)	(小松吉久、 安田勝次郎氏等)		50
1933-2-3?	(新聞社訪問、吾妻泊)			50
1933-2-6、10時	女子職業学校、第二高女			51*
同、13時	第二師範			51*
1933-2-7、14時	第一師範			51*
1933-2-8、12時半	第一高女			51*
同、14時	樺山小学校	市内小学校連合		51*、53
1933-2-9、13時半	日新公学校	市内公学校連合		51*、53*
1933-2-10、10時	静修女学校			51*
同、13時	第三高女			51*
1933-2-11、19時	台北、医専講堂	台湾婦人慈善会	台湾教育会、帝国在郷 軍人会台北市連合分 会、新聞社	56
1933-2-12、19時	同上	同上	同上	57*
1933-2-15、13時	彰化、彰化高等女学校講堂	郡		60
同、14時半	同上	彰化高等女学校 学校友会		60
1933-2-16	嘉義			53*
1933-2-17	台南			53*
1933-2-18、19時	高雄、青年会館	州市教育会		53*
1933-2-21	(来澎、松島記念館泊)			61
1933-2-21、19時	馬公小学校講堂	庁教育会馬公街役場	澎湖庁	61
1933-2-23、夜	(高雄に向かう)			61*
1933-2-26、19時	台中、明治小学校講堂	台中市教育会		62*
1933-2-28	豊原	豊原郡役所		63*
1933-3-2、20時	台北			66*
1933-3-3、午後	基隆女学校			64*
1933-3-3、18時半	基隆、公会堂	基隆同声会	市役所及婦人会	69
1933-3-4、午前	基隆、第一小学校			64*
1933-3-4、午後	基隆、第一公学校			64*
【第四回】				
1936-12-24	(蓬萊丸で着台)			72、73
1936-12-24、19時	(鉄道ホテルで顔つなぎの お茶の会)	(安田勝次郎氏他 保育園関係者)		74

日時	会場	主催	後援	出典
1936-12-26、 9時半	台北、公会堂落成式			75*
日時不明		保育園		71*
【第五回】				
1937-2-4、19時	基隆、公会堂	基隆教化連合会	市役所、婦人会、愛踊 支会、教育会、連合青 年団等	76*、77*
1937-2-21、 18時半	台北、公会堂	永井郁子	台湾国防義会航空部、 台湾教育会、台北市役 所、新聞社等	78*、79* 80*、81 【851】

表2から、永井郁子の台湾楽旅に関して、第一回は6件、第二回は4件、第三回は22件、第四回は1件、第五回は2件、合計35件の独唱会の存在が知られる。中には演奏曲目を詳細に報道した記事も含まれ（後述）、演奏会の内容や観客の反応等が詳しく分かるものもある。

その一方で、永井の演奏活動の内、新聞記事から知られるのはせいぜい半数程度であることも明らかである。第一回での独唱会は、上記「永井郁子邦語独唱会年表」によれば13件（第53～65回）であるが、新聞掲載は6件で、残り7件は報道がない。第二回（1930）の12月10日から19日も空白で、第三回（1933）の2月下旬も不明点が多い。第四回で予告記事2点がある保育園関係の演奏会も、いつ、どこで行なわれたのか分からない。第五回（1937）の2月4日から21日までほぼ空いているが、この間、永井が無為に過ごしたとは考えにくい。

実際、第二回については「邦語独唱会開催地及回数一覧表」（永井、1932、巻末）に「台北14、新竹2、台中、彰化2、嘉義、台南、高雄2、屏原、淡水、花蓮港2、台東」とあるので、第一回の開催数（台北7、台中1、彰化1、高雄1、台南1、嘉義1、新竹2）を引くと、残り「台北7、彰化1、高雄1、屏原1、淡水1、花蓮港2、台東1」の計14件となる。この内、新聞記事があるのは「台北2、新竹1、高雄1」の4件のみである。

このように限定的なものではあるが、これらの新聞記事のお蔭で永井の演奏旅行の概要が浮き彫りになり、いくつかの演奏会についてはその内容と反響とが知られることも事実である。『台湾日日新報』は台北で発行されていた新聞なので、台中や台南についての報道が薄いのはむしろ当然であり、そちらについては今後、別の可能性を考える必要があるだろう。

3. 瓢箪から駒の始まり

ところで、記事2番と3番¹⁰⁾が伝えるように、永井の台湾行きの端緒となったのは詐欺事件であった。この事件について永井が綴った「台湾紀行（一）」によれば、ある冬の夜更けに6枚続きの電報が「台北のオカベといふ未知の人から」届き、その文面は次のようであった（永井、1928、89）。

『ジェームズダンヲツレホンジツ（昨年十二月二十二日）トダイニツキデムカハタルモオ

10) この記事3番および74番は、例外的に記事本文の翻刻を「記事一覧」に掲載する。

イデナシ」ナホハヤシ十五（マネジャー）ユクエフメイ」エンソウカイノヂユンビセルニコマル」ハヤシヨリハナシアツタカ』といふやうな、私には全く寝耳に水の話であつた。こんな詐欺事件がきっかけになつて台湾楽旅が成立したのは嬉しい事ではないが、吉田（晴風）¹¹⁾さんや杉浦さん¹²⁾まで「お目出度い」といふ。なぜといへば人に名前をかたられるやうになつたのは、つまり邦訳歌詞運動の成功だからといふ。

まさに瓢箪から駒の始まりであつたと読める。一方、読売新聞では「台湾総督府有志の招聘により」渡台と報道されている¹³⁾。どちらの報道が正しいのか、あるいは両者は整合的にかみ合うのか、現段階では判断がつかない。

4. 演奏曲目

続いて、これらの新聞記事から台湾での演奏プログラムを可能な限り再構成してみたい。まず、演奏曲目が判明する演奏会を表3に示す。

表3) 演奏曲目が判明する演奏会

年月日	場所	出典
1928-2-11 (第一回第一夜)	台北、医専講堂	8
1928-2-12 (第一回第二夜)	台北、医専講堂	14
1930-11-29 (第二回第一夜)	台北、医専講堂	28、33
1930-11-30→12-3 (第二回第二夜)	台北、医専講堂→樺山小学校	28→41
1933-2-11 (第三回第一夜)	台北、医専講堂	51* (大粋)
1933-2-12 (第三回第二夜)	台北、医専講堂	51* (大粋)
1933-2-15 (第三回)	彰化、彰化高等女学校講堂	60 (大粋)
1933-3-2 (第三回)	基隆、公会堂	65
1937-2-21 (第五回)	台北市公会堂	80*

表3から、演奏曲目の詳細報道はほとんどが台北での演奏会に関して行なわれたことが見て取れる。第一回でも第二回でも第三回でも、台北では二夜連続で独唱会が組まれ、それぞれについて演奏曲目が紙面に掲載された。ただし、第三回の台北と彰化の演奏曲目は、大粋のみが報道されて、個々の曲は掲載されていない（後述）。

第一回（第一夜と第二夜）のプログラムを表4（1、2）、第二回（第一夜と第二夜）のを表5（1、2）、第三回の台北と彰化のを表6、第五回のを表7として示す¹⁴⁾。

11) 尺八奏者の吉田晴風（1891～1950）。宮城道雄と共に新日本音楽を推進した。

12) 永井郁子のマネジャーを務めた杉浦善三（生没年不詳）。『帝劇十年史』（女文社、1920）等の著作がある。その巻末の江山有待樓主人「その著者、杉浦善三君を紹介す」に1920年3月現在で33歳とあるので、1887年生まれと思われる。

13) 『読売新聞』1928年2月7日(火) 10面9-10段「郁子渡台」による。

14) 第四回（1936年）の台北市公会堂落成式に関しては、「本島に馴染深い永井郁子女史の独唱」とあるのみで、演奏曲目までは報道されていない。

表4-1) 第一回第一夜 (1928-2-11) のプログラム (出典: 記事 8 番)

番	番組	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者 (作詞者)
1	ピアノ独奏	ショパン〈ノクターン〉、ウェーバー〈舞踏への招待〉(独奏: 田中雪子)
2	ソプラノ独唱	ジルヒャー〈ローレライ〉近藤朔風、フォスター〈スワニー河〉堀内敬三、ナポリ民謡〈サンタルチア〉堀内敬三
3	ソプラノ独唱	シューベルト〈子守唄〉近藤朔風、ロイテル〈四葉のクローバ〉吉丸一昌、ヴァーグナー〈紡ぎうた〉近藤朔風
4	ソプラノ独唱	ヴォルフ〈朝の霧〉〈園守り〉〈古画に寄す〉堀内敬三
5	ソプラノ独唱	シューベルト〈野薔薇〉堀内敬三 (特に独逸語と邦語にて) バッハ=グノー〈聖母讃頌〉堀内敬三 (特に拉典語と邦語にて)
6	ソプラノ独唱	宮城道雄〈紅さうび〉(小林愛雄)、〈コスモス〉(与謝野晶子)、〈せきれい〉(北原白秋) (箏伴奏: 田中春江、尺八助奏: 菅雪山)
7	ヴァイオリン独奏	クライスラー〈印度人の嘆き〉、シューマン〈トロイメライ〉、ジモスツティ〈マドリガール〉、グリーク〈春に寄す〉、バッハ〈シャコンヌ〉(独奏: 田中栄太郎)

表4-2) 第一回第二夜 (1928-2-12) のプログラム (出典: 記事14番)

番	番組	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者 (作詞者)
1	ピアノ独奏	(表4-1に同じ)
2	ソプラノ独唱	ベートーヴェン〈神の稜威〉近藤朔風、〈いとしきジョニー〉堀内敬三、〈御身を愛す〉堀内敬三
3	ソプラノ独唱	ビショップ〈埴生の宿〉文部省、トステイ〈小夜曲〉堀内敬三、グリーク〈ソルベイグの唄〉堀内敬三
4	ソプラノ独唱	シューベルト〈菩提樹〉〈駆通〉〈老楽手〉堀内敬三
5	ソプラノ独唱	ロッティ〈あはれふたたび〉堀内敬三 (特に伊太利語と邦語にて)、シューベルト〈野薔薇〉堀内敬三 (特に独逸語と邦語にて)
6	ソプラノ独唱	宮城道雄〈うわさ〉(西条八十)、〈コスモス〉(与謝野晶子)、〈せきれい〉(北原白秋) (箏伴奏: 田中春江、尺八助奏: 菅雪山)
7	ヴァイオリン独奏	(表4-1に同じ)

表5-1) 第二回第一夜 (1930-11-29) のプログラム (出典: 記事28、33番)

番	番組	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者 (作詞者)
1	ピアノ独奏	ショパン〈犬ころワルツ〉、モーツァルト〈トルコ行進曲〉(独奏: 藤井光子)
2	ベートーヴェン三つ	〈こほろぎ〉〈我汝を愛す〉〈神のみいず〉
3	子守唄三つ	ブラームス、モーツァルト、ジョスラン
4	各国名曲九つ	(日)〈さくら〉、(満)〈娘々祭〉、(露)〈雁の叫び〉、(独)〈折ればよかつた〉、(英)〈故郷の廃家〉、(米)〈オールド、ブラック、ジョー〉、(佛)〈汝が碧き眼を開け〉、(伊)〈遙かなるサンタルチヤ〉、(拉)〈アベ、マリヤ〉
5	三味線歌謡曲三つ	〈明の鐘〉〈踊らうよ〉〈花嫁〉
6	義太夫歌謡曲三つ	「阿波鳴門」中の〈御詠歌〉、「三十三間堂」中の〈木遣音頭〉、「朝顔日記」中の〈朝顔の歌〉

表5-2) 第二回第二夜 (1930-11-30→12-3) のプログラム (出典：記事28、41番)

番	番組	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者 (作詞者)
1	ピアノ独奏	ショパン〈ノクターン〉、メンデルスゾーン〈プレリュード〉(独奏：藤井光子)
2	シューベルト三つ	〈子守唄〉〈鮎〉〈野ばら〉
3	小夜楽三つ	シューベルト、グノー、トステイ
4	各国名曲九つ	(日)〈荒城の月〉、(英)〈庭の千草〉、(米)〈あはれの乙女〉、(独)〈紡ぎうた〉、(佛)〈悲歌〉、(伊)〈ニーナの死〉、(諾)〈白鳥〉、(露)〈東方のローマンス〉、(諾)〈ソルバイグの唄〉
5	浄瑠璃歌謡曲三つ	妹背山中の〈お三輪の馬子唄〉、三十三間堂中の〈木遣音頭〉、朝顔日記中の〈朝顔の歌〉
6	三弦歌謡曲三つ	〈春の風〉〈花嫁〉〈明の鐘〉

表6) 第三回 (1933) のプログラム

年月日	演奏曲の作曲者〈曲名〉歌詞翻訳者 (作詞者)	出典
1933-2-11	日本新歌謡5、各国名曲8、特別番外に永井拓相作〈新日本建設の歌〉、〈肉弾三勇士〉等	51*
同上	〈唐人お吉〉〈龍峡小唄〉〈台北市民歌〉	56
1933-2-15	1) 洋琴独奏、2) 日本新歌謡6曲、3) 各国名曲8種、4) 特別番外4番	60
1933-3-2	1) 瀧廉太郎〈隅田川〉(武島又次郎) 2) 齋藤佳三〈駄菓子売の歌〉(支那民謡) 3) リムスキー・コルサコフ〈薔薇と乙女〉永井郁子 4) プラームス〈折ればよかつた〉高野辰之 5) 佐々紅華〈唐人お吉〉(西條八十) 6) 中山晋平〈龍峡小唄〉(白鳥省吾) 7) 宮良長包〈新日本建設の歌〉(永井柳太郎) 8) 古賀政男〈肉弾三勇士〉(渡邊栄伍)	65

表7) 第五回 (1937-2-21) のプログラム (出典：記事80*番)

番	内容 (出演者等)
1	映画「民間航空に就いて」(佐倉光一)
2	映画「防空日本」(台湾軍司令部提供)
3	〈民間飛行機の歌〉(永井郁子)
4	ピアノ独奏：ショパン〈バラード〉(福井順子)
5	独唱〈さくら〉〈荒城の月〉〈サンタルチア〉〈四ツ葉のクローバ〉〈折ればよかつた〉(永井郁子)
6	舞踊「お夏」(永井あや子)
7	箏、尺八合奏〈鈴虫〉(野坂操壽、下川麗華)
8	独唱〈コスモス〉〈初便り〉〈せきれい〉〈うわさ〉(永井郁子)
9	舞踊「お染」「野崎小唄」(永井あや子)
10	〈君が代〉(一同唱和)

以上の表から、第一回（1928）では原語歌詞と邦訳歌詞の歌い比べ・聞き比べをして、聴衆の理解を探るという模索をしていたが、第二回（1930）以降はそのような試みは姿を消して、邦訳歌詞のみで貫いていることが見て取れる。第二回以降、「各国名曲九つ（ないし八つ）」がプログラムの柱となることは、朝鮮での演奏旅行の場合と同様である（津上、2019a：48-52）。第三回（1933）では邦人作曲家の作品が格段に増えている（後述）。第五回（1937）の催しは、永井が1935年秋に開始した「音楽報国による愛国機献納」運動の発展形と理解され、ここで歌われた〈民間飛行機の歌〉は四天王延孝作詞、菅原明朗作曲〈飛行機の歌〉（津上、2019b：50）と推察される。

5. 〈新日本建設の歌〉

第三回では、瀧廉太郎〈隅田川〉、齋藤佳三〈駄菓子売の歌〉、佐々紅華〈唐人お吉〉、中山晋平〈龍峡小唄〉、宮良長包〈新日本建設の歌〉、古賀政男〈肉弾三勇士〉と日本人作曲家の手になる歌曲が多数取り上げられた。この内、最も問題となるのは永井柳太郎作詞の〈新日本建設の歌〉である。永井柳太郎（1881～1944）は、1932年から1934年まで第六代の拓務相を務めた政治家で、〈新日本建設の歌〉の歌詞は神戸日伯協会発行の機関誌『ブラジル：移植民と貿易』第6巻10号（1932年10月）に「拓務省設立三周年を迎へて」と書き添えて掲載されている。その歌詞は、次のように侵略主義的な内容を持つ。

- 1) 汝は日の本 光の児／渦巻く波も 大空も／汝の舞台ぞ 躍れかし／輝く日本 新日本
- 2) 汝は日の本 光の児／その身その意気 その腕／建国の業に 打ち込まん／輝く日本 新日本
- 3) 汝は日の本 光の児／太平洋は 広けれど／容るるに狭し 汝が心／輝く日本 新日本
- 4) アジアの東 満蒙の／大地耕す 汝の鋤／いざや拓かん 新天地／輝く日本 新日本
- 5) 天地悠久 アマゾンの／流れのほとり 千年の／糧は豊穰に 汝を待つ／輝く日本 新日本
- 6) 猛獣吠ゆる アフリカの／夜を破りて 汝の腕に／撞けや文化の 暁の鐘／輝く日本 新日本
- 7) 海の極みも 地の涯も／汝の家郷ぞ ああうれし／万里の心 永遠の生命／輝く日本 新日本

第三回の渡台に当たって、「『新日本建設の歌』／聴いて戴きたい／永井郁子女史語る」と題した記事の中で、永井は次のように述べている。

「永井拓相等も邦語歌詞音楽普及の為是非行つて見ろとの事で出かけて参りました、私こちらにお伺ひするについて一つの歌を持つて参りました。拓相作詞宮良長包氏作曲の『新日本建設の歌』と云ふのですが従来歌はあつても曲は感心せなかつた所情熱的作曲家であると云ふ宮良氏によつてはじめて快心のものが出来上がった訳であります、之を台湾の若

い方に唄つて載きたいと存じます」(記事49)。

ここから、第三回は当時の拓務相永井柳太郎に背中を押されての渡台であったと分かる。上掲の表2から明らかのように、第三回では「女子職業学校／第二高女、第二師範、第一師範、第一高女、樺山小学校、日新公学校、静修女学校、第三高女、彰化高等女学校、馬公小学校、明治小学校、基隆女学校」と多数の学校で独唱会が行なわれた。この内、樺山小学校の会(1933-2-8)については、「小学校児童のための連合音楽会」として「市内六小学校六年児童二千四百名はさしも広い講堂を埋め永井女史は子守唄始め十数番を独唱し、又永井柳太郎氏作詞の『新日本建設の歌』を合唱し午後三時四十分閉会した」(記事52)と報告されており、驚くほど多数の児童に〈新日本建設の歌〉を聞かせるだけでなく、歌わせるという取組が大規模に展開されたことが知られる。さらに「尚公学校の部は九日午後二時より日新公学校で開かれる筈である」(記事52)とあり、台湾人の子弟のための学校であった公学校においても、子どもたちがこの歌を聞き、かつ歌ったことが明白である。

〈新日本建設の歌〉は大人向けの二夜の演奏会(1933-2-11、12)(記事54)でも、離台前の最後の演奏会(1933-3-2)(記事65)でも歌われたが、何と言っても子どもたちに歌わせるという形で植民地における日本語教育、皇民化教育に資する結果を生んでいることは否定できない。台湾で皇民化政策が推進されたのは1937年9月の日中全面戦争開始以後であるが(岡本、2013:102)、それを半年ほど先取りする形で永井が邦語歌唱運動の一環として〈新日本建設の歌〉を子どもたちに歌い、かつ歌わせるという活動をしたのは見落とすことのできない事実である。

6. 永井郁子女史後援会

では、永井の台湾楽旅を組織したのはどのような人々だったのだろうか?表2にあるように、第二回(1930)を主宰したのは「永井郁子女史後援会」であった。これについて「前記の後援会は台北の知名の士十数名により今回新に組織されたもので其の顔ぶれの中には安田勝次郎、谷口巖、谷河梅人、一條慎三郎、江里口秀一、増田秀吉、高橋秀人の諸氏も見えている」(記事25)と報道されて、主要メンバーを知ることができる。

ここで筆頭に挙げられている安田勝次郎は、1900年から奉職し、台北地方法院・鳳山出張所・台南地方法院等で判官を務めた人物である(岡本、2018a:261、262、269)。実際、第一回(1928)の歓迎茶話会で挨拶したのも「安田氏」(記事10)であったし、第三回(1933)でも「学校方面に主として出演し日本語の持つ懐かしい響きを大いに唄ひまくるとのことで目下小松吉久、安田勝次郎氏等が斡旋中」(記事50)とされ、第五回(1937)についても「顔つなぎのお茶の会」を主宰した人物として名前が挙げられて(記事74)、継続的に永井の台湾招聘を担ったキーパーソンと見ることができる。

また、谷口巖は医師(谷口、1908)、谷河梅人(慶應義塾出身)は新聞記者で『台湾日日新聞』の主幹を務めた人物(コイエット、1930:巻末)、増田秀吉(1887年生、東大法学部卒)は殖産局農務課長、税関長を経て、1935年9月から翌年まで新竹州知事を務めた人物(岡本、

2018b : 403、451、459)、高橋秀人(1894年広島生、東大法学部卒)は台北市警務部長、総督官房会計課長を経て(岡本、2018b : 451、765)、1932年秋から台北博物館長を務めた人物(高橋、1939 : 369)であり、台北各界の重鎮を配したものと見られる¹⁵⁾。

この顔ぶれを見ると、台湾総督府との関わりは深く、第一回から「安田氏」が関わっているところから、「台湾総督府有志の招聘により」渡台という上記の読売新聞の報道は正鵠を得ている。上述の詐欺事件をきっかけとして、台湾総督府関係者が永井郁子の台湾招聘に動き出したと理解するのが適切と考えられる。

7. おわりに

以上から、『台湾日日新報』には永井郁子に関する記事が81点見出されること、そこから永井の台湾楽旅は第一回(1928年2月)、第二回(1930年11~12月)、第三回(1933年2~3月)、第四回(1936年12月)および第五回(1937年2月)の5度に及ぶこと、これらの記事から第一回6件、第二回4件、第三回22件、第四回1件、第五回2件、合計35件の独唱会の存在が知られること、とはいえ、それらは実際に永井が行なった演奏会のせいぜい半数程度しか報道していないこと、永井の台湾行きは詐欺事件に端を発していること、内6つの演奏会については演奏曲目の詳細が明らかになり、他の3つについてはプログラム構成の大枠が知られること、第三回については当時の拓務相永井柳太郎の勧めで渡台し、多数の小学校・公学校・高等女学校・師範学校で独唱会を行なって、永井柳太郎作詞、宮良長包作曲の〈新日本建設の歌〉を歌い、かつ児童生徒に歌わせたこと、永井の渡台を組織したのは台湾総督府の官僚を中心とする永井郁子女史後援会であったことが明らかになった。台湾で皇民化教育が推進されるのに約半年先立って、それに資するような活動を音楽家としての永井郁子が行なっていることは深く受け止めなければならない。

『台湾日日新報』永井郁子関連記事一覧

- 1) 大正13年10月21日(火) 第9508号 2面 5-6段 「声楽家永井郁子さんが／伴奏国粹主義主唱」
【東京特電二十日発】
- 2) 昭和2年12月25日(日) 第9938号 2面 7-8段 (漢文) 「永井女史之音楽会消滅、仏教青年会収回入場券」
- 3) 同 4面 6-7段 「永井女史の／音乐会立消え／仏教青年会で／入場券回収中」 「声楽家永井郁子女史が来台すると云ふので台北市の台湾仏教青年会が主催となり音乐会を催す事となり入場券を各方面に配布中であつた所が右は中間に介在して斡旋して居た林某の術策で金円詐取が目的であつた事判明し同人は行方を晦まして終つた之が為め仏教青年会は各方面へ陳謝しつつ入場券を回収して居るが同入場券を買ひ求めた人は西本願寺内仏教青年会へ申出られたいと」
- 4) 昭和3年1月28日(土) 第9972号 5面 6-9段 「ソプラの [ママ] 歌手／永井郁子女史／二月十一、十二両日／医専講堂で独唱会」 【写真(2段抜)】

15) 一條慎三郎と江里口秀一については、国立国会図書館で検索してもヒットがなく不明である。

- 5) 昭和3年2月4日(土) 第9979号 3面1-2段「永井女史の独唱会／来る十一、十二の両日／医専講堂で開催」
- 6) 昭和3年2月7日(火) 第9982号 5面5段「永井女史ら出発」「六日神戸発因幡丸に乗船」
- 7) 昭和3年2月10日(金) 第9985号 2面3-6段「『自国語を愛ませう』／と云ふ大理想の下に／邦語独唱を(上)」
- 8) 同、2面6-7段「永井女史／独唱会曲目／第一日(十一日)分」
- 9) 同、7面12段「永井女史演奏会」【高雄電話】
- 10) 昭和3年2月11日(土) 第9986号夕刊 5面10段「永井郁子女史／歓迎茶話会」
- 11) 同、朝刊1面8段「人事」「永井郁子女史(音楽家)十日來台(鉄道ホテル)」
- 12) 同、2面5-7段「『自国語を愛ませう』／と云ふ大理想の下に／邦語独唱を(下)」
- 13) 同、2面6-7段【写真(2段抜、5人の集合写真)「十日本社を訪問した永井郁子女史一行」】
- 14) 同、2面7-9段「永井女史／独唱会曲目／第二日(十二日)分」
- 15) 昭和3年2月12日(日) 第9987号 3面5-7段「おお、美しきソプラノ！／聴衆ただ酔ふ／永井郁子女史の邦語独唱／第一夜の光惚と感激」
- 16) 昭和3年2月13日(月) 第9988号 3面11-12段「怒涛のごとき／アンコール／永井郁子女史演奏会第二夜／聴衆ただ美しい昂奮に包まる」
- 17) 同、夕刊1面3-6段【写真(4段抜)「医専大講堂で開かれた音楽会」】
- 18) 昭和3年2月16日(木) 第9991号 4面11段(漢文)「諸羅／女史講演／永井郁子女史」
- 19) 同、2面10-11段「高雄の／永井女史／演奏会大成功」【高雄電話】
- 20) 昭和3年2月21日(火) 第9996号 2面10段「人事」「永井郁子女史 二十一日午後二時二十分発列車にて台北発内地へ」
- 21) 同、5面4段「永井女史音楽会」「…同日出帆の便船で離台」
- 22) 昭和3年2月22日(水) 第9997号 2面7段「永井女史／独唱会」
- 23) 昭和3年9月3日(月) 第10191号 3面4-6段「音楽が判らなくなつた話／永井郁子さんのことなど／関鑑三」
- 24) 昭和3年10月5日(金) 第10222号 2面3-4段「長唄や義太夫の／西洋音楽的独唱」【東京特電四日発】
- 25) 昭和5年10月19日(日) 第10960号 2面5-7段「日本音楽界の女王／永井郁子女史來台／十一月二十九、三十の両日／医専講堂で独唱会」【写真(2段抜)】
- 26) 昭和5年11月9日(日) 第10981号 7面9-10段「永井女史の／邦語独唱会／収益は義捐金に」
- 27) 昭和5年11月12日(水) 第10984号 5面10段「永井女史の／独唱会／屏東でも開／くに決定」
- 28) 同、7面12-13段「邦語独唱会／両日の曲目」
- 29) 昭和5年11月22日(土) 第10994号 8面1-2段「音楽漫筆(上) 永井郁子(寄稿)」
- 30) 昭和5年11月23日(日) 第10995号 6面3-6段「音楽漫筆(下) 永井郁子(寄稿)」
- 31) 昭和5年11月27日(木) 第10999号 2面5-7段「本島晩秋の楽壇賑ふ／日本音楽界の新人を

同伴し／永井郁子女史二十七日著台」

- 32) 昭和5年11月28日(金) 第11000号 2面11段 「人事」 「永井郁子女史 (音楽家) 一行二十七日來台 (吾妻)」
- 33) 昭和5年11月29日(土) 第11001号 2面 8-9段 「永井郁子女史／邦語独唱会／霧社事件の義捐に」
- 34) 同、7面12段 「けふの催し」 「永井女史義捐音楽会 (午後七時より) 医専講堂にて」
- 35) 昭和5年11月30日(日) 第11002号 2面 1-4段 「杵屋勝伊勢女史と／永井郁子女史の試演」 【写真 (4段抜)】
- 36) 同、7面12-13段 「永井女史の／「歌の夕」／二十九日夜開催」
- 37) 同、7面13段 「けふの催し」 「永井女史義捐音楽大会 午後七時より医専講堂にて」
- 38) 昭和5年12月1日(月) 第11003号 7面 5段 「永井女史の／演奏会延期」
- 39) 昭和5年12月2日(火) 第11004号 7面13段 「永井女史の／独唱会／樺山小講堂で／三日夜開催」
- 40) 同、夕刊1面 6-7段 「永井女史独唱／鉄道ホテルか／一日関係者協議」
- 41) 昭和5年12月3日(水) 第11005号 7面 7-10段 「永井女史独唱／会の曲目」
- 42) 同、2面13段 「永井女史独唱会／二日は新竹で」 【新竹電話】
- 43) 同、12-13段 「永井女史独唱会会場変更」 [広告]
- 44) 昭和5年12月7日(日) 第11009号 5面 7段 「永井女史独唱会／盛況」 【高雄電話】
- 45) 昭和5年12月9日(火) 第11011号 7面11段 「永井女史歓迎茶話会」
- 46) 昭和5年12月11日(木) 第11013号 7面11段 「義捐独唱会の純益／を本社に依託」
- 47) 昭和5年12月19日(金) 第11021号 2面 9段 「永井女史離台」 「十九日出帆の朝日丸にて」
- 48) 昭和8年1月12日(木) 第11769号 3面 9段 「永井郁子女史／近く來台」
- 49) 昭和8年2月3日(金) 第11791号 7面 8-10段 「『新日本建設の歌』／聴いて戴きたい／永井郁子女史語る」
- 50) 昭和8年2月4日(土) 第11792号 2面 6-8段 「來台の永井郁子女史」 【写真 (3段抜) 「写真は本社を来訪の永井女史」】
- 51) 昭和8年2月8日(水) 第11796号 7面 7-8段 「永井郁子女史の／邦語独唱会／十一、十二医専講堂で」
- 52) 昭和8年2月9日(木) 第11797号 7面12段 「永井女史の／邦語独唱会／きのふ樺山小で」
- 53) 昭和8年2月10日(金) 第11798号 3面11段 「永井女史／邦語独唱会」
- 54) 昭和8年2月11日(土) 第11799号 7面11段 「永井女史の／邦語独唱会／十一、十二の両／夜医専講堂で」
- 55) 同、13段 「けふの催し」 「永井郁子女史独唱会 午後七時より医専講堂」
- 56) 昭和8年2月12日(日) 第11800号 3面10-11段 「永井女史の／邦語独唱会／昨夜医専講堂で／聴衆と市民歌を練習」
- 57) 同、13段 「けふの催し」 「永井女史音楽会 午後七時から医専講堂にて」
- 58) 昭和8年2月14日(火) 第11802号 3面 5段 「郁子女史独唱会」 【高雄電話】
- 59) 昭和8年2月17日(金) 第11805号 8面 (漢文) 「彰化／女史演奏」

- 60) 同、3面11段「永井女史／彰化独唱会」
- 61) 昭和8年2月23日(木) 第11811号 3面11段「永井女史独唱会」【馬公二十二日発電】
- 62) 昭和8年2月26日(日) 第11814号 3面7段「永井女史独唱会」【台中電話】
- 63) 昭和8年2月28日(火) 第11816号 4面13段(漢文)「会事」「豊原郡役所主催之永井郁子女史独唱会」
- 64) 昭和8年3月1日(水) 第11817号 7面12段「永井女史の／最後の独唱会／三月三日基隆で」
- 65) 昭和8年3月2日(木) 第11818号 4面1-4段「日本語もて／外国歌曲を唄ふ／永井郁子女史／夜八時／台北／サヨナラの会」
- 66) 昭和8年3月4日(土) 第11820号 2面12段「永井郁子女史／各方面へ寄附」
- 67) 昭和8年3月8日(水) 第11824号 3面3-4段「邦語歌詞のため／唄ひぬくつもり／永井郁子」
- 68) 昭和8年3月9日(木) 第11825号 2面9段「永井女史寄金」
- 69) 昭和8年3月13日(月) 第11829号 7面13段「基隆演奏寄附金の／寄贈は同声会」
- 70) 昭和8年6月17日(土) 第11924号 2面4-5段「永井郁子女史の／中継放送を拒絶す／台湾始政記念日の催しに／東京放送局が変な横槍」【東京十五日発電通】
- 71) 昭和11年12月22日(火) 第13198号 5面10段「永井女史演奏会」
- 72) 昭和11年12月25日(金) 第13201号 9面「永井女史一行」「きのふ蓬萊丸で着台」【写真(2段抜)：6人の中央に永井郁子】
- 73) 同、11面11段「蓬萊丸入港／吉田欧亞局課長も来台」「永井郁子女史の一行」【基隆電話】
- 74) 同、11段「永井女史歓迎茶話会」「公会堂落成式の余興に出演のため来台した永井郁子女史一行は落成式終了後、鎌倉保育園台湾支部主催の慈善音楽会に出演する事となつたので、安田勝次郎氏その他保育園関係者は二十四日午前七時鉄道ホテルに古市市社会課長及び操觚者二十名を招待し顔つなぎのお茶の会を催した」
- 75) 昭和11年12月26日(土) 第13202号 7面1-4段「台北市に一偉観／公会堂！みごと竣工／盛り沢山の祝賀余興も超豪華／けふ盛大に落成式」
- 76) 昭和12年2月3日(水) 第13240号 5面5段「永井女史独唱会」【基隆電話】
- 77) 昭和12年2月4日(木) 第13241号 5面8段「地方近事」「基隆／独唱と舞踊」
- 78) 昭和12年2月16日(火) 第13253号 2面7-8段「永井郁子女子[ママ]の／飛行機献納大演奏会／二十一日、台北市公会堂で」
- 79) 昭和12年2月21日(日) 第13258号 9面9段「今日の催し」「永井郁子女史独唱会 午後六時公会堂」
- 80) 同、夕刊3面2-4段「民間飛行機献納の為の／永井女史演奏会／二十一日夕台北市公会堂で」【写真(2段抜)】
- 81) 昭和12年2月23日(火) 第13260号 2面7段「永井女史の独唱会／ゆうべ盛会を極む」

参考文献

- 岡本真希子 2013「国語普及政策下台湾の官僚組織における通訳育成と雑誌『語苑』：1930-40年代を中心に」同志社大学人文科学研究所編『社会科学』42(4)：73-111
- 岡本真希子 2018a「植民地統治初期における台湾総督府法院の人事——判官・検察官の任用状況と流動性を中心に」同志社大学人文科学研究所編『社会科学』48(2)：239-275
- 岡本真希子 2018b『植民地官僚の政治史——朝鮮・台湾総督府と帝国日本』東京：三元社
- コイエット 1930『閑却されたる台湾』谷河梅人訳編 台北：台湾日日新報社
- 後藤暢子 2000「永井郁子編著『転機』解、戦前の邦訳歌詞問題をめぐって」『国立音楽大学研究紀要』35：254-250
- 高橋秀人 1939「断想」台湾総督府博物館編『創立三十年記念論文集』台北：台湾博物館協会、369-372
- 谷口巖 1908「台北ニ発生セシ虎列拉患者ト予ガ診療セシ急性腸胃炎患者入佐次トノ関係ニ就テ」『台湾医学会雑誌』63：37-42
- 津上智実 2018「朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱ』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』65(2)：83-100
- 津上智実 2019a「『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』33：41-68
- 津上智実 2019b「読売新聞データベース『ヨミダス歴史館』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』66(1)：45-59
- 永井郁子 1928「台湾紀行（一）」『春秋：政治・経済・思想・文芸・月刊雑誌』2(5)：88-90
- 永井郁子 1929『邦訳歌詞問題の前後、転機、反響編』東京：噴泉堂
- 永井郁子 1932『いばらの道：邦語歌唱十六講』東京：噴泉堂
- 畑中良輔 2013『日本歌曲をめぐる人々』東京：音楽之友社

(本研究は JSPS 科研費 JP18K00155 を受けたものです)

(原稿受理日 2019年9月29日)